

旧開智学校校舎の擬洋風建築

旧開智学校校舎は、1870年代に流行した擬洋風建築の代表的な例である。左右非対称の2階建てで、木造建築でありながら、石造やレンガ造りを意識したデザインになっている。これは、西洋の建築物の美しさを木工技術で模倣しようとした日本の大工が編み出した融合様式である。その結果、東洋と西洋の要素が融合した独特の建築物が生まれた。

旧開智学校校舎のファサードには、この擬洋風の要素が多く見受けられる。1階床下や建物の角にある石積みの部分（「コイニング」と呼ばれる）は、妙に平らだ。実は、この「石」や「レンガ」は、木と石膏と塗料で作られたもの。また、正面壁や八角屋根の塔にも同様の手法でレンガ造りのフェイクが施されている。このように、ある素材を別の素材で表現することは、擬洋風建築の特徴である。

バルコニー付きのフロント部分

旧開智学校校舎を代表する建築物のひとつが、正面玄関に設けられたバルコニー付きのフロント部分だ。そのモチーフは、擬洋風建築によく見られる和洋折衷のもので、2階建ての建物の両端に設置されている。以下では、このフロント部分に見られる擬洋風の特徴を視覚的に説明する。

下層部には波と龍の彫刻が施されている。龍の彫刻は、近くの仏教寺院である浄林寺から持ってきたものと思われる。龍の周囲を波が取り囲むというモチーフは、明らかに東洋的なものである。鯉が滝を泳いで昇り、龍になるという中国の龍門伝説を想起させる。このような図像は、木製のパネル扉の内側に施された彫刻にも見ることができる。この龍の彫刻の猛々しさは、エントランスの両脇に配置された金属製の照明器具の繊細な曲線のラインと対照的なものとなっている。

バルコニー上段には、校名を記した旗を手にした元気なケルビムが描かれ、西洋的なモチーフがより鮮明に表現されている。このデザインは、松本で多くの読者を得ていた大手新聞社「東京日日新聞」のロゴマークを参考にしたものと思われる。ケルビムは唐破風のアーチの中に配置されている。このような唐破風は寺社仏閣に多く見られるもので、自由な組み合わせが可能な擬洋風建築の特徴をよく表している。

バルコニーに出るための扉があるように見えるが、実はこの開口部も講堂の窓である。この半円の欄間窓は、1870年代には珍しい建築材料であった輸入色ガラスの破片で作られている。窓を囲む鉄柵のような精巧な模様は、この建物を設計した地元の名工・立石清重（1829-1894）のトレードマークである。この「鉄」は、漆喰で丹念につくられたものだ。

意外なことに、この校舎の歴史において、このフロント部分にはさまざまな表情があった。1890年代後半、女鳥羽川の氾濫で大きな被害を受けたため、校舎の象徴であった擬洋風のデザインはほとんど取り払われた。龍、ケルビム、切妻、漆喰の複雑なデザインはすべて、屋根の上にある控えめな三角形の屋根破

風に取って代わられた。1964年に旧開智学校校舎が移築された際、このフロント部分は元の姿に戻された。

八角形の塔

正面上部の屋根には、八角形の塔がある。19世紀後半、大工たちは屋上塔を洋風建築の象徴のひとつと考えた。1876年の竣工当時、風見鶏と避雷針を備えた旧開智学校は、松本城と並んでこの地域で最も高い建物の一つであったと思われる。周囲の低層建築の中で、近代化の象徴としてひととき異彩を放っていた。